

価値観の生成過程に関わる問題点  
—知識の活性化と感情との関連を中心に—

Constructing the Model of 'View of Value':  
Focussing on the Relations Between Knowledge  
Activation and Emotion

渡 辺 智 山  
Toshitaka Watanabe

*Résumé*

This thesis describes a model on the process of formation of value judgement, which has been constructed by arguing about 1) knowledge and/or information, 2) emotion, in relation to 'view of value' that is produced from the process of human mental activity.

As a result, the view of value arises as follows: (a) Knowledge which is relevant to the view of value is selected from a group of knowledge previously activated by an action of interest. (b) The selected knowledge is further chosen, rejected, or modified, by an 'analogy' with the newly acquired information and/or knowledge, and (c) finally with the existing criterion for value judgement. The criterion is thus renewed through this set of the mental process, and a new view of value grows.

- I. 図書館の世界と価値
  - A. 価値論の観点から捉える図書館
  - B. 利用者研究小史
  - C. 認知的利用者モデルと価値観
- II. 「価値観」とその解釈
  - A. 価値論研究小史
  - B. 「価値観」の定義—「観」ということ—
  - C. 「価値観」生成モデル構築のための留意点
- III. 「価値観」の世界
  - A. 「知識」と「情報」
  - B. 感情・情動・アージュ
  - C. その他の留意点
- IV. 「価値観」生成モデルの構築とその解釈

渡辺智山: 愛知淑徳大学大学院博士課程, 愛知県愛知郡長久手町大字長湫字片平9

Toshitaka Watanabe: Graduate School of Library and Information Science, Aichi Shukutoku University, 9  
Katahira, Nagakute-cho, Aichi-gun, Aichi

1994年11月30日受付

## 価値観の生成過程に関わる問題点

- A. 「価値観」生成モデル
- B. 「価値観」生成モデルと利用者
- V. 問題点とこれからの展望
  - A. 残された課題と問題点
  - B. これからの展望

### I. 図書館の世界と価値

#### A. 価値論の観点から捉える図書館

##### 1. 社会的存在としての図書館

図書館の社会的存在の意義がますます高まっている現状に於て、重要な問題となるのは、図書館と利用者との相関関係である。図書館は、資料の保存であるとか、情報の提供等といった機能を持つわけだが、図書館と利用者との相関関係に於て、鍵となるものは何かを考えたとき、それは「価値」である。図書館は、利用者のために「価値」あるものを所蔵し、提供すべきであり、一方で利用者は、自分にとって「価値」ある情報を、獲得する為の場所として、図書館を求めているはずである。これら両者の相互作用により、図書館は、社会的に認められる存在になると考えられる。この意味に於いて、「価値論」の立場から図書館と利用者の関係を問うことは重要である。また、今後、価値論の立場からのアプローチが、「社会の中の図書館」「人と図書館」「図書館の評価」「図書館のあり方」等といった問題に対してなされることは、図書館情報学にとって、新たな観点を生み出していくという意味に於て重要になってくるのではないだろうか。

##### 2. 図書館の機能に関わる問題点と価値

では、図書館の機能に関わる問題点に関し、具体的に価値論の立場から捉えられるものとして何が挙げられるだろうか。以下に主なものを提示する。

###### a. 資料の選択・収集・保存・廃棄

図書館の基本的機能である資料の選択・収集・保存・廃棄の問題は、何らかの価値判断基準に於てなされているはずである。それ故、価値論のアプローチによって捉えられる問題である。

###### b. 情報検索と情報提供

情報検索・情報提供の問題に於いて重要な問題として、適合性(relevance)、適切性(pertinence)の問題があげられる。それぞれは、検索式と検索結果、そして情報要求と検索結果との「一致度」の問題である。この一致度の問題は、データベース制作者側からは利用者にとって良いデータベースはどうあるべきかを、逆に利用者側

からは情報検索はどうすべきかを、提示するだろう。この意味に於て、一致度の問題は価値の格差・異同の問題として取り上げることができる。

###### c. 図書館サービスの評価

図書館サービスの評価は、蔵書数など図書館自体に関わるものと、レファレンスなど利用者との関わり合いを重要視するものがあるが、両者とも図書館がどうあるべきかという大きな問題に関連していることから、図書館の価値という問題として取り上げることができる。

###### d. 情報の価値

情報現象を扱う根本的な問題の一つとして、挙げられ、情報の経済性に関わる問題点と結び付く。

###### e. 図書館運営費

価値の「経済的」意味から、蔵書予算、管理予算等の金銭的問題が、価値問題として取り上げることができる。

##### 3. 価値論の応用範囲

このように、図書館が機能するのに関わる問題点を価値論の立場からアプローチすることができるが、価値論の重要性は、以下の見田宗介のことに集約されるだろう<sup>1)</sup>。

〈価値〉の概念は、さまざまに専門化された社会諸科学のための統一点を提供する。そしてそれは人間性に関する他のアプローチとの統合のためのキーとなる。知覚に関する実験心理学から政治的イデオロギーの分析にいたる、経済学の予算研究から美術理論や言語哲学にいたる、文学から人間叛乱にいたる……多種多様な専門的研究をむすびあわせうる、潜在的な橋わたしの概念(bridging concept)が〈価値〉および〈価値意識〉である。

ところで、図書館情報学分野でなされている価値に関する考察、もしくは価値論の立場からのアプローチによる考察は、例えば、図書選択論、情報価値論等が挙げられるが、それらは、価値そのものが生み出される過程についてはあまり触れていない。特に価値を生み出す人間

の価値判断に至るまでの過程についての研究はほとんど見られない。しかしながら、価値を生み出すのは、人間の業である。価値論を論じる上で人間を切り離して考えることはできないだろう。その意味では、図書館情報学の価値論は人間の知的過程不在の価値論であるといえる。

では、図書館情報学の中で人間という対象を取り上げてきた研究は無いのか、という疑問が生じるが、周知のとおり、主に利用者研究 (user study) が、人間という対象を取り上げてきたはずである。利用者研究の枠組みの中では、利用者という人間に焦点をあて、人間の知的活動の過程を踏まえた研究は多く見ることができる。そこで、図書館情報学分野の価値論では不十分であった人間の知的活動の過程の追及に関して、次章にて利用者研究に焦点をあて考察する。

## B. 利用者研究小史

前節冒頭で価値論からの立場から図書館と利用者の相関関係を問うことが重要であり、更に図書館情報学分野の価値論に於ては人間の知的活動過程の追及の不十分さがあることについて触れた。その中でも、図書館と利用者との相関関係に於て、利用者側の観点に立つ時、利用者が図書館に対してどのような価値を求めているのかという問題は、図書館情報学に於ける価値論にとって重要な主題である。そこで、この問題を位置づける為には、利用者という対象を扱ってきた、従来の利用者研究の流れを知らなければならない。以下に、利用者研究がどのような歴史的背景をもっているのかを概観する。

岡澤和世は、『*Annual Review of Information Science and Technology*』(以下は ARIST と表記する) を基盤に利用者研究の変化を 3 段階 (1. ARIST に利用者研究の章が設けられる前, 2. 1966 年～1975 年まで, 3. Crawford の文献展望以後) に分けているが<sup>2)</sup>、ここでは、便宜上、方法論という観点から、(1) 行動主義的観点、(2) 認知的観点の大まかに 2 系列に分ける。

### 1. 行動主義的観点と利用者研究

行動主義的観点による利用者研究は、1960 年代から 70 年代にかけてなされた。この時期は、心理学に於いて、新行動主義という研究動向が、「S-R 的観点」の行き詰まりにより、2 極 (1. 限られた領域の行動現象の解明をめざすミニ理論への移行, 2. 記述的アプローチを強調する急進的行動主義への移行) に分化する時期である。心理学は、人間の心の理を追求する学問分野であるが、

利用者研究の対象が人間であることを考えあわせる時、心理学、特に行動主義心理学の影響を多分に受けていることは多分に推測される。

例えば、この時期の利用者研究の Review は、毎年、ARIST に掲載されており、研究が活発であったことが伺われるが、その時期が「ミニ理論への移行」<sup>3)</sup> という流れの時期と重なっていたり、Reviewer が、心理学の知的背景をもっていたり、更に、調査に用いられた方法論が、貸出記録であるとか、レファレンスに於いてなされた質問の記録などを基盤にしているということから、客観性及び科学への志向性という意味を全面に押し出す行動主義心理学 (正確には新行動主義心理学) が影響していると考えられる。

因みに、現在の利用者研究の方法論が、「観察法」あるいは質問票・利用記録・アンケートなど、現実に目に見える、形として残る客観的なデータとして記録可能なものを基盤に内容分析を行う方法であるのは、行動主義的観念の根強さを示している。

さて、この時代の成果としてあるのは、図書館利用者でもある科学者・研究者の所属する科学共同体の存在や、その中の「知識の伝搬 (diffusion of knowledge)」の過程、あるいは、科学者間のコミュニケーション過程であった。Diana Crane<sup>4)</sup> や、William D Garvey<sup>5)</sup> の研究は、この時代の主要研究である。

ところが、図書館を含む研究環境、また社会環境が、コンピュータ化されてくると、情報検索と研究者 (利用者) との関係が注目されるようになる。ここで登場するのが、1980 年代から顕著になってくる認知的観点によるところの利用者研究であった。

### 2. 認知的観点と利用者研究

1980 年代は、R. S. Taylor, T. D. Wilson, B. Dervin, N. J. Belkin, らが注目された時期で、情報ニーズの解明といった認知的側面が、そして「situation-gap-use モデル」「ASK モデル」が提出されることに見られるように、認知・認識過程追求の重要性が認められるようになった時期である。この認知・認識過程追求の背景には、(1) 行動主義の限界、(2) 精神活動の総合性もしくは複合性という観点の欠如、があった。(1) 行動主義の限界とは、簡潔に言えば、行動には心的過程の介在を仮定せざるを得ない場合があるということである。行動主義の前提には、経験を通して後天的に獲得される学習現象の解明が中心にあるのだが、行動自体は、学習現象解明に対して必要条件ではあるが、十分条件ではないのである。

価値観の生成過程に関わる問題点

表1 Carol C. Kuhlthau の情報探索過程 (Information Search Process) モデル

Stages in ISP	Feelings Common to Each Stage	Thoughts Common to Each Stage	Actions Common to Each Stage	Appropriate Task According to Kuhlthau Model
1. Initiation	Uncertainty	General/Vague	Seeking Background Information	Recognize
2. Selection	Optimism			Identify
3. Exploration	Confusion/Frustration/Doubt		Seeking Relevant Information	Investigate
4. Formulation	Clarity	Narrowed/Clearer		Formulate
5. Collection	Sense of Direction/Confidence	Increased Interest	Seeking Relevant or Focused Information	Gather
6. Presentation	Relief/Satisfaction or Disappointment	Clearer or Focused		Complete

とはいえ、この時期の利用者研究は、方法論としては行動主義的観点からの手法を取り入れデータを収集していることから、完全に行動主義を排除しているわけではない。この時期の認知的観点による利用者研究は、心理学分野で言うところの「緩やかな行動主義<sup>9)</sup>」であると言える。

また、(2) 精神活動の総合性もしくは複合性という観点の欠如は、問題解決過程の心的過程が「知識・情報」のみの問題ではないことを意味する。現在の利用者研究では、認知的利用者モデルの構築への志向へと研究動向が変化してきているが、現在の認知的利用者モデルは、問題解決の過程を、「gap」であるとか変則的な「状態」というように、ある「段階」そのものに焦点が合わされているのが主流であると考えられる。

しかし、問題解決に至る過程は、知的活動の総合的・統合的な過程であるから、問題解決過程を説明する上で、「段階」というような観点だけでは十分に説明することは不可能である。それ故、モデルの構築へ向けては、更なる動的な統合的な観点によってなされなければならない。

C. C. Kuhlthau は、問題解決過程に於いて被験者がどのような探索過程を経るのかを調査するために、被験者

自身に問題解決にあたって何を利用し、その時の感情的状態と自分の思考状態が、どうなっているのかを記述させ、それら記述内容を分析することで、感情 (Feelings)、思考 (Thoughts)、行動 (Actions) の3つから成る複合体として捉える情報探索過程 (Information Search Process) モデルを構築している (表1)<sup>6)</sup>。

彼女のモデルは、従来のモデルに顕著であった人間の「知」への偏りに向かうことなく、問題解決過程を、人間の活動全体という総合的なものとして見なしているところに、精神活動の総合性もしくは複合性という観点の欠如を補う意味で評価すべきものであり、今後の認知的利用者モデルの構築が、統合的観点によりなされるべきであることを示唆するものである。

C. 認知的利用者モデルと価値観

以上に見てきたように、従来の認知的な観点による利用者研究では、価値がどのように生み出されるのかという点についてはあまり深く研究されていない。ここで、利用者の持つ図書館に対する価値とは何か (利用者の価値観) という問題が、利用者研究の新たな潮流である認知的利用者モデル構築という研究動向に、どのように位置づけられるのが問題となる。

一般に価値観は、主体（個人/共同体）が持つ「ものの見方」として理解されている。しかし、百科事典や専門辞典を紐解けば、様々な分野で多様な定義が存在しており、一様に価値を扱うことができないことが分かる。そこで、価値観を、社会などの共同体を歴史的に位置づけるものと、個人的な「志向」としてのものに分化してみると、認知的利用者モデルの構築という観点からは、個人的な「志向」としての価値観に焦点があたることになるだろう。個人的な志向としての価値観を認知的利用者モデルとしてモデル化することが、価値論を認知的利用者モデルの構築という研究動向に位置づけることにはなっていないだろうか。

勿論、個人を取り巻く環境を無視することは不可能であり、多くの価値判断基準とされるものは、社会からそのまま取り入れているものもある。しかしながら、社会からそのまま受け入れた基準もまた個人が「理解した結果」存在するものであると考えられることから、価値現象の起点を個人に求め、便宜上社会という存在を一度切り離して考察すべきだと考えるのである。

以上、簡単にはあるが、図書館情報学の価値論では、人間の知的過程への探求が不十分であること、そして人間の知的過程の探求も行っている利用者研究に於ては、価値概念が不十分であることを述べてきた。それ故、本稿では、価値論の観点と認知的利用者モデル構築の観点から、個人的な価値志向としての価値観を、従来の利用者モデルの不十分さを踏まえたよりダイナミックな観点による統合モデルとして、哲学的な、または心理学的な観点から構築することを目的とする。モデルを構築することが、上記の価値論と利用者研究との橋渡しのものとなり、そして、提示されたモデルが、従来の及び将来の認知的利用者モデルや、今後の図書館の存在意義に対して何らかの視座を与えるようなものになればと考えている。

## II. 「価値観」とその解釈

### A. 価値論研究小史

本来ならば、価値論を考察する上で、価値論に関わるすべての分野の価値論研究史を概観しなければならない。しかし、本節の目的は、価値研究の歴史そのものを追及していくことではなく、価値論の現状がどうなっているのかを把握することにあるので、以下は、価値論として確立している分野として、主に哲学分野と社会学分野を取り上げ、それぞれの分野でなされている価値論を

提示することで、価値論の研究史として見なすことにする。

#### 1. 哲学分野における価値論<sup>7-9)</sup>

哲学分野における価値の問題は、善や美の問題として、古来より問題にされてきたが、善や美を広く価値として論じるようになったのは、19世紀末からであり、主なものに、以下の価値論がある。

##### 1) 自然主義的価値論

価値とは、欲求・関心とそれにこたえる対象の性質との関係において成立するものとする経験論的立場。

##### 2) 直感主義的価値論（価値実在論）

価値を事実関係から説明することに反対し、価値は通常経験ではとらえることができず、情感的直感ないし知的直感によってのみとらえられる非自然的、非経験的な独自の性質であると主張する立場。

##### 3) 論理実証主義・分析哲学の価値論

よい、わるいというような価値的な表現は単に話し手の感情を表示するにすぎないもの、いわば人の叫び声のようなものだから、真とも偽ともいえない検証不可能なものだとする立場。

##### 4) マルクス主義的価値論

価値とは、歴史的に特定な社会または階級に属する人びとに、現実のものとして、または目的ないし理想として有用であり、必要であるところの、自然および社会の現象であると主張する立場。

#### 2. 社会学における価値論<sup>10-11)</sup>

経済学、行動主義心理学分野では、一般にモノの属性としての価値を捉えてきた。経済学分野では、使用、交換におけるモノに関する価値の計算が主題であり、行動主義心理学分野では、人間の行動を決定するのが価値の役割で、価値自体が、部分的に刺激の中に存在するものと考えられた。これは、価値を客観的に存在するものとして捉えようとした見方である。

一方、社会学分野における価値の問題は、モノの属性としてではなく、人間および人間が構成する社会が生まれ出すある種の基準ともいべき概念として存在する。主な研究に、技術、社会、言語という他の3つのカテゴリーと一緒に文化という体系を構成する要素が価値であるとする Florence Kluckhohn、個々の社会の典

## 価値観の生成過程に関わる問題点

型としてある価値体系を指す「価値志向 (value orientation)」という考え方を提出した Parsons, Edward Shils, Clyde Kluckhohn, 13 の異なった「生き方」という価値概念を提出した Charles Morris, 経済学的な、そして不定であるような価値概念を拒否し、認知対象を判断するための“基準としての価値”を主張した Robin Williams, 価値を行動様態に関わる価値 (道具的価値) と最終的な状態に関わる価値 (最終目標価値) との間の区別をし、これらを利用することによって、価値が、測定比較できる (RVS (Rokeach Value Survey) 法) ことを主張する Milton Rokeach, らが挙げられる。

### 3. 哲学・社会学分野の価値論に於ける問題点

哲学分野での価値論に於て、主に研究の対象となるのは、善とは何か、美とは何かなど、価値の普遍性を問う問題や、価値そのものが実在するの否かを問う問題である。これらの問いは、ことばという道具を用い、価値という概念そのものを分析することによってなされるが、研究対象はあくまでも価値そのものである。勿論、人間と対象の性質との関係から価値を捉えるにあたって、人間の重要性を考える立場もあるが、その場合の人間は、価値を規定するのに必要な構成要素という存在でしかない。その意味では、価値が生み出されるまでの過程、特に人が価値を生み出す過程を追及するという、認知的な観点によるところのアプローチが、哲学分野では不十分である。

一方、社会学分野での価値論では、価値意識が中心に据えられ、そして 1) 行為の理論、2) パーソナリティの理論、3) 文化の理論、4) 社会の理論、という 4 つのカテゴリーの中で論じられている。価値とは、個人あるいは共同体 (社会) をある種の歴史の中に規定するもの、もしくは位置づけるものであり、また信念体系とよばれる世界を構成したりするものである。日本人は「恥」の文化を持つというような指摘や、人生の目的や生き方そのものの分類などは、その例である。

しかしながら、社会学分野も哲学分野と同じように、価値が生み出されていく過程についてはあまり触れられていない。4 つのカテゴリーの中の行為の理論における価値論に於ても、価値は、ある個人の行為を観察することにより、行為の種類から価値を決定するというようなボトムアップ的な観点から捉えられている。価値がどのように生まれるのかという問題よりも、行為という客観的に見えるものから推測できる価値そのものが問題なのである。しかし、価値について考えているのは、あく

までも人であるのだから、価値と価値意識との関係を考えた時、どのように価値意識が価値を生み出すのかは問題とならなければならないだろう。この意味で、社会学分野の価値論が、価値が生成する過程について十分に研究されていないというのは問題である。

因みに社会学分野の価値論では、方法論に関しても問題を指摘できる。社会学分野の価値論は、客観的側面を重視し価値を測定・比較する為に、一般的にアンケートという形式で、データが収集され分析されるが、この社会調査法は、アンケートされる状況、質問される内容とその仕方などによってデータの統一性を欠くという欠点を指摘することができる。表現されたものだけでは単に傾向がつかめるだけに過ぎず、アンケートに答えた個人の価値に関する本質的な部分は分からない。

いずれにせよ従来の価値論では、プロセス追及の不十分さという問題、アンケート等方法論 (特に社会学分野) の不適切さという問題が指摘できる。その背景には、価値の捉えにくさや価値に対する適切な方法論のなさがあるが、では、これらの問題点を踏まえた時、本稿はどのような方法論を採るべきなのか問題となろう。

そこで本稿では、ある仮定を提示しその仮定を演繹・検証するという方法論を用いることにする。何故なら、従来の方法論の欠点を部分的にしり埋めていくことができるという意味で有効であると考えられるからである。因みに、前章で、本稿は哲学的あるいは心理学的な観点から論じると述べたのは、上述のようにアンケートのようなボトムアップ的な方法論とは逆のトップダウン的な方法論であることを提示したいが為である (ここでいう心理学的観点には、行動主義は含まない) が、ボトムアップ、トップダウンそれぞれの方法論が、特に「心」という対象を扱うときには決定打とならないのは、経験的に明らかである。

### B. 「価値観」の定義—「観」ということ—

上述の如く価値論の立場は数多い。前章に於いて、本稿が、個人的な志向としての価値観を捉えていくと主張したが、個人を捉えるにしても、個人のどの側面を中心にして捉えるべきなのか問題となろう。人間は、一生価値を生み出し、変容させていくが、その「全過程」を拾い出して論じるとは、不可能であるからである。

そこで、個人のどの側面に注目するのかを明確にする為に、本稿で示す「価値観」とは何かを示さなければならないだろう。本来、価値観ということば (特に「観」

ということば)は、日本語固有の用語である。英語の場合、価値(金銭的・物質的価値を含む)は、単数形で value と表記され、複数形の values になると、社会的な価値体系、価値基準という意味になる。価値観という日本語に対応する英語は、複数形の values であるが、その意味は社会的な側面の色彩が強く、個人的な側面を強調する意味はあまりない。その意味では、value(s)には個人的志向としての価値観の意味はない。本稿では個人的志向としての価値観の意味を強調する為、以下に見るように、個人的志向を意味として持つ「観」という仏教の意味に注目し「価値観」を定義する。

「観」とは、『日本国語大辞典』によると<sup>12)</sup>、

- 1) 外から見ること。また、見えたもの。外見。または、見えた時の感じ。様子。状態。ありさま。おもむき。
- 2) (見る所であるところから) たかどの。ものみ。楼台。
- 3) 道士なかまのいる建物。道宮。
- 4) 仏教語。物事を細心に分別し、観察すること。また、心中で深くみきわめて、ものの本質を悟ること。

と表記されている。ここで注目されるべきは、4)の意味であり、例えば、「観念」「観想」という言葉の「観」が意味するところのものである。そこには、人間の能動的・積極的な態度(「S-R 理論(刺激-反応理論)」といった単純なメカニズムではなく、人間の側の積極的な意思としての「働きかけ」)が表現されており、また「物事を細心に分別し」たり、「観察」したり、「心中で深くみきわめて、ものの本質を悟る」という、その行為の主体となる人間の思考過程が表現されている。更に、「Theory」の語源である「Theoria」に「観」=「観る」という意味があることから<sup>13)</sup>、理論構築の枠組みとしての意味をも示唆している。

見田宗介は、価値が、ある特定の対象または対象の属性として、客体の側の要素なのか、あるいは態度、観念、ないし好みとして、主体に伴うものか、また、価値が、単なる欲求・願望・カセクシスに伴うものか、あるいは規範的な基準に関わるものだけに限定されるべきなのか、という問題意識から、価値を「主体の欲求を充たす、客体の性能」と定義している<sup>1)</sup>。ここで主体とは、個人または社会集団を指し、欲求とは、「のぞましい」とする傾向のすべてを指す。更に客体とは、価値判断の対象となる一切のものであり、性能とは、属性・特性・能力・

力・またはそれらの「程度」を指す。見田が、「性能」という言葉を用いたのは、事物が価値「である(be)」のではなく、価値「がある(have)」と考えられるべきであり、そして、我々の、価値相互を比較したり測定したりすることができる能力に注目した時の、価値の「行為選択の基準」という役割・機能を重要視した為である。

本稿では、見田の定義を踏まえ、「観」の意味を強調した、個人的志向としての「価値観」(括弧を付けて表記する)を「能動的・個人的な知的活動によって処理され生み出される、各個人の欲求を満たすような客体の特性に対する見方」と定義する。「能動的・個人的な活動によって処理され生み出される」という表現が、「観」の意味に対応している。「能動的」「個人的」というのは、ある対象が、自分にとってどういう意味を持つのか、あるいはどのような価値を持つのかを「内観」する、その行為の性質を意味している。

### C. 「価値観」生成モデル構築のための留意点

「価値観」は、心的な処理過程により生み出されるのだから、例えば、感覚・知覚とは何か、記憶とは何か、判断とは何か、想起・推論とは何か等、考察すべき事柄は非常に多い。しかしながら量的にも、質的にも本稿ではすべてを詳述することはできない。それ故、「価値観」生成モデルを構築するにあたって、どのような留意点が考えられるのかが問題になる。そこで、「価値観」生成モデル構築に関する留意点の範囲を、世界の中にある対象を認知する時点から、価値判断へ至るまでとし、その中でも、1)「対象-認知・認識過程」の関係、2)「価値づけ-感情」の関係について問題を焦点化する(第III章で考察)。1)「対象-認知・認識過程」の関係の問題は、価値判断を下す以前の問題として必須であり、また、2)「価値づけ-感情」の関係の問題は、『哲学小事典』に“感情の問題は広く対象に対する主観の態度としての〈価値付け〉の問題とつながっており、哲学的な価値論では当然主題と成らなければならない”<sup>14)</sup>とあるように、「価値観」の基盤となる問題である。

## III. 「価値観」の世界

### A. 「知識」と「情報」

「対象-認知・認識過程」の関係を問うにあたっては、1)自己と世界との関係、2)知識と情報との関係、3)知識の性質、の3点について考察する。

1)自己と世界との関係を問うことは、「知る」過程が

成立するための基盤を問うことである。コギトとしての「自己」（「我思う、故に我あり」という時の自己）と対象を含んだ「世界」との関連のあり方が認められない時、個人と世界は独立したものとなり、ものを「知る」ということができなくなる。この意味で、自己と世界との関係は考察すべき問題である。また、2) 知識と情報との関係を問うことで、本稿で用いる「知識」「情報」がどういう意味で使われるのか、を明確にする。「情報」「知識」それぞれが、ある文脈においてのみ有効であるような定義がされる現状に於いては、「情報」と「知識」そのものを対象にするのではなく、関係論の観点から眺めるべきであると考えられる。そして、3) 知識の性質を問うのは、「知識」が独立した存在ではないことを、また「知識」には、経験に代表されるような実践的な知識、言葉に代表されるような理論的な知識が共に含まれることを示す為である。

#### 1. 自己と世界との関連

我々が事象を知るという時、そこには必ず自己と世界とが関連する必要がある。何故なら、自己と世界とが関連して初めて後に続く認知であるとか認識といった過程へと移ることができるからである。では、自己と世界とが、どのように関連するのか、あるいは自己は世界の中にどのように位置づけられることができるのかが問題となるだろう。この点については、以下「学習」を手がかりに考察する。

##### a. 学習と模倣

エモリー大学とジョージア州立大学との共同研究機関である言語研究センターの類人猿カンジーは、言語を使用するサルとして有名である。何故、類人猿が言語を使用することが出来るようになったのか。カンジーの学習法に注目すると、その方法が、人によって強制的に教えるのではなく、カンジー自身、自分の主人である S.S. Rambough 博士との日常生活から学習するようにしていることが分かる<sup>15)</sup>。その結果、カンジーは、ことばを話すこと (speech) はできないが、記号を利用し、また簡単な文法をも駆使して、自分の意思を伝えることができるようになった。利用する記号の数は 500 以上にものぼり、その中には名詞のみではなくて、動詞もまた含まれている。

この事実が意味するのは、「学習」が、単に受動的になされるのではなく、学習する主体の側の積極的な働きかけが、非常に重要であるというということである。

「学習」とは、元々「まねぶ」であって、「まなぶ」と

「まねる」という意味があり<sup>16)</sup>、「まなぶ」ということは、「まねて行うこと」である。一般的に「模倣」は、「創造」と対比され、コピーの意味だけが強調されているが、実は「模倣」は単なるコピーの意味だけではない。Aristoteles が、“模倣は子どもの頃から人間に具わった本性であって、人間と他の動物との違いは、人間が最も模倣能力にすぐれた生物であり、まず模倣を通してものを学ぶということである”<sup>16)</sup> と述べているように、「模倣」には、能動的な行為としての意味があるのである。

##### b. 「自己投出 (self-commitment)」と「認識」

では、学習に関わる主体的な働きかけとは何を意味するのか。Michael Polanyi<sup>17-19)</sup> は、人間と世界との、接触と関連のあり方の基盤、つまり認識の基盤になる原理として、「自己投出」という概念を提出した。自己投出とは、世界に対して能動的・積極的に働きかけてなされる「知る過程」のことである。

例えば、「水の味の識別」「視覚障害者の杖の使用法」を例に例に挙げよう。我々が水の味を識別するには、まず水を口に含んだ時に、自らの意識を、水に対して同時に自らの舌に対して集中させなければならない。これは経験的に明らかである。我々は「識別してやろう、理解してやろう」という積極的・能動的な働きかけを自分に課し、舌以外にあった自らの意識を舌へと移行させるという心的なメカニズムを働かすことで水の味を識別するのである。この時、我々の身体は、世界を知るための道具的存在（自己と世界との関連を持つ為に利用されるもの）となる。

一方、視覚障害者は、杖を探り針のように道具として用いることで自らを取り巻く世界を知ることができる。それは、手の代わりにになっているような杖自身に対し自らの意識を集中させることで、杖で地面を叩いた時に手に伝わる感覚を手がかりにし、自己を世界に関連づけている。

水の味の識別の仕方と、杖の使用による周りの状況の知り方とは、共に世界を知るための「道具的存在」（舌・杖）に自己投出することによりなされる。そこで自己投出がどのようになされるのかが問題となるのだが、Michael Polanyi<sup>17-19)</sup> は、自己投出の仕方として、潜入 (dwell in, indwelling) を提示した。潜入とは、働きかける対象に自己の意識を「滑り込ませる」ことを意味する。「滑り込ませる」というのは、水の味の識別の場合は、舌と水との物理的接点に、杖の使用による状況の知り方の場合は、杖と地面との物理的接点に、知的活動である意



識を故意に「介入」させることである。

勿論、杖は、無機的な存在であり、感覚系など持つはずもないのだから、舌の場合と同様に意識そのものを杖に「滑り込ませる」ことはできない。しかし、杖を利用している本人は、杖を自分の「手の延長」のごとく、まるで自分の手の感覚が杖に乗り移ったように感じているはずである。何故か。それは、感覚が、物理的には、杖に対する意識の従属的な意識に過ぎないが、杖の利用者である本人は、自分の意識を手ではなく、杖に対して潜らせていると信じているからであろう。このような場合もまた「潜入」と呼ぶ。

一般の人々が、例えば水の味が明確に識別できないのは、普段の生活においては、水や舌に「自己投出」「潜入」する必要があまりないからである。ここに自己投出や潜入の程度に差があることが見てとれる。識別できる人は、格段の努力をしてきた人であり、換言すれば、自己投出、潜入の程度が甚だしい人である。

#### c. 「価値観」と自己投出の重要性

以上により、自己投出は、自己と世界との間に介入し、両者を関係付ける機能として位置づけられることになる。それ故、自己投出が認められなければ、「知る」過程は存在しない。我々は、単に情報を受動的に得ているわけではないのである。これについて換言すれば、認知・認識の行為とは、個人的な行為であり、特に情報の獲得は、個人の能動性によって成立するということになる。

では、自己投出の観点から、本稿の主題である「価値観」はどのように捉えることができるのか。

例えば、我々が、「絵」に対して「美しい」とか「良い」とかの価値を認める場合を考えると、絵の何かが、我々の価値判断に影響を与えるのではなく、我々自身が、あるいは各自の脳が、絵に対して価値を与えているということになるだろう。ある絵が、自分にとってすばらしいものであると判断する時、その絵がどのような絵で、自分にとってどういうものなのかを内観する過程が存在するはずである。つまり、絵について知る過程があるということである。知る過程は、先述の如く「自己投出」が必要なわけだから、「価値観」に於ても「自己投出」により裏付けされなければならない。我々は、「自己投出」(絵の場合は、視覚系への「潜入」)＝「個人的な働きかけ」により、対象となる絵が自分にとってどういう内容のものなのか、そしてどんな意味を持つのかという各自の絵に対する意味＝価値を決定するのである。これは、絵自体が価値があるのではなく、それを見ている個

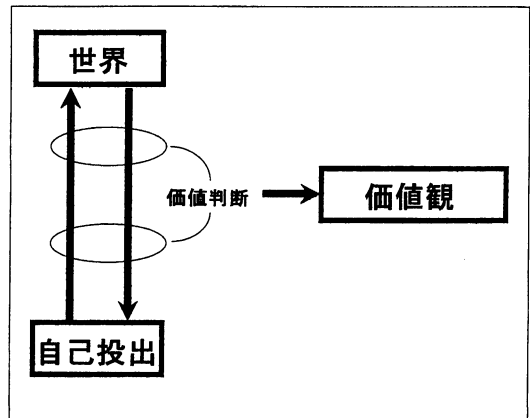


図1 「自己投出」と「価値観」との関係  
我々は、世界と自己投出のやりとりに於て、様々な価値判断を行いながら、事象を認知・認識している。多くの価値判断を繰り返すことにより、経験が生まれ、物の見方としての価値観が生まれるのである。

人が、見ている絵に対して価値を「付与」することを意味する。

更に、水の味の識別のできる人とできない人がいるように、「自己投出」の程度により、同じ対象でも知り方及びものの見方が異なるのであるから、同じ絵を見ても異なる「価値観」を抱く人がいるのは、当然である。各個人の「価値観」の異なりは、経験の異なりからくると言われるが、それは知る過程に於て獲得する情報、利用する知識の違いに起因し、更に、自己投出に起因する。

このように「価値観」の基盤となる価値判断が、自己と世界とのやり取りを基盤にしてなされると考える時、これをモデル化すると以下ようになる。(図1)

#### 2. 「知識」と「情報」の関係

我々は、自分の回りの世界＝環境をそのままの形式で受け取っているわけではなく、何らかの形式に変換している。例えば、かの有名な「エッシャーの図」や、図と地に関する研究でしられているデンマークの心理学者 Edgar J. Rubin による「ルビンの壺」は、物理的には二次元平面に描かれた単なる点と線との集まりであるが、もし我々がそのままそれらを受け取っているのであれば、単に点と線との集まりとして分かるだけである。しかし、現実には、「ルビンの壺」の例であれば、ワインの壺と向き合った横顔とが交互に見えるはずであろう。ここに、情報と知識との差異は何かという問題が見て取れるに違いない。

## 価値観の生成過程に関わる問題点

### a. 従来の知識と情報の関係

知識と情報の関係論を主張した研究者には、古典的な区別（データ・情報・知識）を提示し、データ・知識・情報それぞれを、価値が評価されていないメッセージ、特定の状況における評価されたデータ、将来の一般的な使用の評価されたデータ、であると定義した McDonough<sup>20</sup>、情報を理解する為に 1) 体系アプローチ、2) 知識アプローチ、3) メッセージアプローチ、4) 意味アプローチ、5) 効果アプローチ、6) 過程アプローチ、の 6 つの異なる解釈の仕方を提示し、情報を、世界を体系付けるもので、認知されたものによって作り上げられた知識とした Wersig<sup>21</sup>、「組織化」に注目し、情報が組織化されたものが知識であり、データ・情報・知識の三者の間には、円環関係が成立すると主張した藤川正信<sup>22</sup>、“ $K[S] + \Delta I = K[S + \Delta S]$ ” ( $K[S]$  は知識構造;  $\Delta I$  は獲得 (入力) 情報の変化量; この式は、知識構造が情報  $\Delta I$  の入力により  $\Delta S$  だけ変化することを示す) という等式を提示し、知識の成長が単なる追加ではなくて、知識構造を変えるものであることを示した B. C. Brookes (1977 年には等式を、 $\Delta I + K[S] \rightarrow K[S + \Delta S]$  と修正: 単に情報  $\Delta I$  が、知識構造の  $\Delta S$  と「=」ではなく、 $K[S + \Delta S]$  として知識構造が変化するまでの認知・認識過程を表現しようと「 $\rightarrow$ 」を提示しダイナミックな観点を強調)<sup>23</sup>、生産され獲得される潜在的な情報が、受け手によって知覚されるという点を考慮して Brookes の概念を拡張し、“ $pI \rightarrow K[S] + \Delta I \rightarrow K[S + \Delta S] \rightarrow pI$ ” ( $pI$  は獲得される潜在的な情報の存在を、 $pI'$  は受け手が新たに生み出す情報の存在を示している: 「個人」と「世界」との関係が表現されている) という式を提示した P. Ingwersen<sup>24</sup>、知識と情報は連続体の両極であって完全には区別・定義はできないと主張する富永健一<sup>25</sup>、等がある。

「情報」「知識」を関係論の立場から捉えていこうとするのは、それぞれが単独で存在するのではなく互いに規定し合っこそ本質が得られるのではないかという観点があるからであろう。しかし、片方が形式的にせよ決まらなければ、他方もまた決まらないはずである。そこで以下は、片方を形式的にせよ決定する為に、情報という概念を語源に立ち返って捉え直してみることにする。

### b. 語源としての情報

「information」の語源が、ラテン語にあり、「informo」「informatio」にあることは周知のとおりであるが、ラテン語辞書を紐解いてみれば、以下のように明記

されている<sup>26</sup>。

「informatio」: 「(アイデア)の形成, 概念」

Formation (of an idea), conception.

「informo」:

1. 一つの形 (shape) を与えること, 形作ること。

To give a shape to, fashion, form.

2. 何らかの概要 (outline) または計画 (構想) を (ことばで) 述べること。

To give an outline or plan of, sketch (in words).

3. (アイデアなどを) 心に形成すること。

To form in the mind (ideas, esp. rough ones); to form an ideas of (something). imagine.

4. 教育によって (人間を, 心を) 形作ること。

To mould (a person, his mind) by instruction.

ここで重要なのは、「information」の意味が、元々何かに「形を与えること」で、特に心においてはアイデア、概念を形作るという意味を持ち合わせていることである。本稿では、これを「informo」としての情報と呼ぶ。「informo」としての情報は、まるで「無」を「有」に変えるかのように機能し、我々が、何かを知ろうとするときの手がかりとなる。また、アイデアとは、いわば心に沸き上がるさまざまな事象であるが、先の意味からは、その沸き上がりを手助けするように働くのが、情報である。例えば、概念を知識の属性であると考えるとき、概念は、情報と見なすことができ、「informo」としての情報は、知識を形作る要素として捉えることができる。

しかしながら、このような見方は、一側面しか見ていず、「案内」「知らせ」「ニュース」などの情報の意味は欠落している。ただし、「知る」ことによってはじめて情報たるものになるという見方によって、先の情報の意味を「informo」としての情報の意味に転化し、情報と呼ぶことは可能である。このように「informo」としての情報は、知識と情報の関係を考える上で、重要な手がかりとなる。

### c. 本稿での知識と情報の関係

以上、従来の知識と情報の関係について、及び情報の語源について考えてきたが、これらに関しては、「個人の

介入」という共通項が見出すことができる。そこで、本稿では、「個人の介入」を基盤におき、「知識」を「発見・探索の手がかり」として定義する。「知識」とは、我々人間の知的活動を遂行するのに用いられ、既に個人により獲得された心的な所産である。それ故、図書館・情報学分野での「百科事典類は知識の総体である」という見方は、上記の定義からは、比喩であり、知識そのものではないことになる。以後、「経験」に代表されるような実践的な知識、また「ことば」に代表されるような理論的な知識を、共に含み「知識」として表記することにする。

一方、「情報」は、先述したように、「informo」としての情報として見なし、知識を形作るものとして、「知識を得るための手がかり」と定義する。それ故、「知識」と「情報」の関係を「情報」の観点から眺めれば、「情報」は「発見・探索の手がかりを得るための手がかり」ということになる。この定義は、「知識」と「情報」との関係間に人間の介入を認める立場を基盤に持たせている為に、コンピュータ・サイエンス分野等の情報概念は脱落し、曖昧なものとなっているが、そこには「知識」と「情報」とが相対的であるという重要な視点がある。「知識」と「情報」が相対的であるからこそ、知識と情報とは明確に区別できず、一つの「連続体」としか表現できないとされたりするのである。

従来、「情報」「知識」を関係論の立場から捉える時、一般的には、ピラミッドモデルが提出される（真理を頂点に下に向かって知識、情報、データ、事物・事象）が、そこでは、明確な区別があるかのように表現されている。しかし、現実的に多くの定義は、上述の如く曖昧になり、明確に区別できていないのであるから、ピラミッドモデルでは不十分であり、他の形式を用いて考えなければならないだろう。ピラミッドモデルで表示されている「階層性」と、「情報」「知識」の相対性と連続性を表現するモデルが必要なのである。

では、必要とするモデルとは何か。それは「螺旋(spiral)」という観点である。螺旋として考えれば、階層性と相対性・連続性はうまく表現できる(図2)。

### 3. 「知識」の活性化と認識の包括性

知識という概念が、哲学上の認識論で捉えられてきたのは、認識とは何かを考えることが、知識とは何かを問うこととはほぼ同義であるからである。認識には、機能的側面(ものごとを知ること)と結果としての側面(ものごとを知った結果)とがあるが、一般的には、認識という過程を経た結果、創り出されるものが「知識」

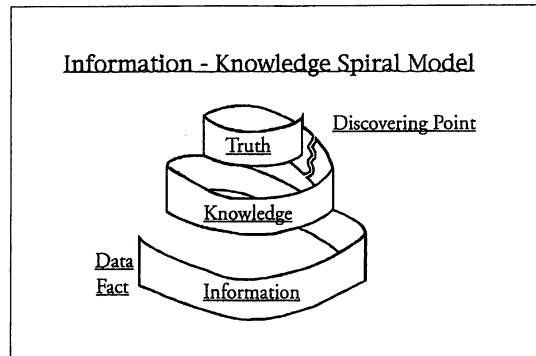


図2 情報と知識の螺旋モデル

「情報」と「知識」を関係論の立場から捉えるとき、従来のピラミッドモデルが示している階層関係と、「情報」と「知識」の相対的關係とを結びつけると、螺旋という形式になる。人は「情報」「知識」を獲得しながら、事柄を認識する(発見という活動によって得られた結果をここでは「Truth」と表記した)。

であろう。それ故、認識の仕方を追及することが、「知識」を理解するのに通じていくと考えられる。更に、「知識」と「情報」の関係は、相対性・連続性を持つことから、認識を追及し、「知識」を理解すれば、自ずと「情報」の理解へと結びついていくはずである。

#### a. 認識の包括性

我々はどうに認識を行っているのか。手がかりとして、自転車の運転技術の「修得」=「知り方」を考えてみると、そこに示されるのは、我々が、語る以上に、より多くのことを知ることができるという事実である。自転車の乗り方を知るのに、ペダルをどれくらいの力で動かしたらよいのか、また、左右のバランスをとるためには、左右の体重移動の割合はどのくらいなのか、を知るのにマニュアルを使用するわけではない。乗り方の修得は、試行錯誤という努力によってなされるはずである。この知る過程の全ては決して言語化できず、他人に完全に伝達することは、不可能である。

しかしながら、現実的に我々が、乗り方を知ることは可能であるし、実際に行っている。我々が、このような語る以上に、より多くのことを知ることができるのは、実は、我々の認識の仕方が、「包括的」であるからである。この認識の性質を「認識の包括性」と呼ぶ。認識した結果を「知識」として貯めておくのは記憶の仕業であるが、David E. Rumelhart は、我々が記憶するのは、対象そのものだけでなく対象を含んだ状況というものも同

時に記憶していると指摘する 27)。これは、認識の仕方の「包括性」を認める主張である。

では、認識の「包括性」から何が言えるのか。それは、認識によって得られた「知識」は、常に何等かの全体性と結び付いているということである。

ここで、「何等かの全体性との結び付き」について考える為に、「部分」と「全体」という関係を考えてみる。例えば、音楽における音と楽曲の関係を手がかりに考えてみると、ある曲を聞いて、その楽曲が自分にとって非常に価値あるものと分かる時、そこで認識しているのは、「部分」としての瞬間の音ではなく、頭の中で、音と音をつなぎ合わせて（想起して）得られた「全体」としての楽曲であろう。「部分」と「全体」の関係に於て、楽曲の中の音は必要不可欠な要素ではあるが、決して音だけを集めても、良い楽曲になるとは限らない。ここに、「部分」の総和が「全体」と等しくならないというゲシュタルト的な見方を見出すことができる。当然、最初から我々は、完全なる「全体」を知っているわけではなく、「部分」を手がかりにして、多くの「部分」を統合するという手順を踏まなければならないが、それら「部分」は、「全体」との関連においてのみ存在できるのである（ここでいう「部分」と「全体」は、それぞれ相対的であり、「全体」と考えられていたものが、実はより高次の「全体」の中の「部分」である、というホロンの関係と呼ばれる関係を持つものと考えている）。自らが耳にする音楽がすばらしい音楽であると判断するには、既にすばらしい音楽を知っていなければならないのである。

Michael Polanyi<sup>17-19)</sup>は、鑑識眼、視覚障害者の杖の道具の使用などを例に挙げ、その認識の仕方から、非言語的知識の獲得過程を重視し、その過程を「暗黙知」と呼んだ。先述の、自転車の乗り方の修得の仕方同様、「暗黙知」もまた認識の「包括性」に支えられ、「暗黙知」により得られた「知識」は、「何等かの全体性」と結び付いて存在する。彼の見方もゲシュタルト的な観点を重視した見方であり、認識過程を考える上での有効な手がかりとなる。

以上の論述から、言えることは、認識が包括的であるが故に、知識もまた、包括性という共通な性質でカテゴリー化されるということ、つまり、認識によって得られる知識は、単独のものとして成り立っているのではなく、様々な概念・属性などが、何らかの形式で「全体」と結び付くことによって成り立つということである。「知識」と我々を取り巻く世界とは決して一対一の写像

として表すことはできない。脳の構造的側面からは、活動電位（インパルス）が脳内で全体にわたり、伝達されていく様子が観察されており<sup>28)</sup>、また、神経細胞（ニューロン）に一度インパルスが通過するようになると、以降は、インパルスが通過しやすくなることが発見された。これらのことから、記憶は、多くの神経細胞がネットワークを張り巡らし、そのパターンとして夜空に輝く「星座」のごとく存在しているとされている。このネットワークという考え方は、「知識」が単独では存在できないことに関する構造的側面からの根拠となるかもしれない。

#### b. 知識の活性化

我々は、価値判断をする時、必ず「知識」を活用する。先述したように「知識」とは、発見・探索の手がかりであり、また実践的知識、論理的知識の両者を含めたものだが、価値判断に「知識」が活用される為には、記憶として保持されされている「知識」が活用のために発現されなければならない。これを「知識の活性化」と呼ぶ。

前項では、認識の「包括性」について考え、「知識」もまた「包括的」に存在していることを主張したが、どのように「知識」が活性化されるのかについてはまだ述べていない。以下に「知識の活性化」について具体的に考察する。

「知識」の活性化の具体的な例としては、Marvin Minskyの主張する「K—ライン (Knowledge—line)」という考え方がある<sup>29)</sup> (図 3)。「K—ライン」とは、記憶を活性化するためのガイド機能を含んだ記憶構造のことであり、Minskyの主張するエージェント（心を構成する小さなプロセスの一つひとつ）の、線で接続された構造を指す。その構造は、認識の「包括性」に通じる。「K—ライン」の活性化によって起こる記憶の活性化のメカニズムは、例えば、何か良い考えが浮かんだり、問題を解決したり、あるいは忘れたい経験をしたりとすると、必ずそれを「表現する」ためのK—ラインが作られ、その後、そのK—ラインを活性化させると、そのK—ラインに接続されていたエージェントたちが活性化され、心の「状態」が、前に問題を解決したときや良い考えが浮かんだときと同じような「状態」になる、というものである。先述の如く「知識」は単独では存在せず、何等かの全体性と結び付いているわけだから、「知識」の活性化もまた経験を表現する為のK—ラインが活性化されるように、「包括的」に何らかの全体性と結び付いた形式でなされると考えられよう。

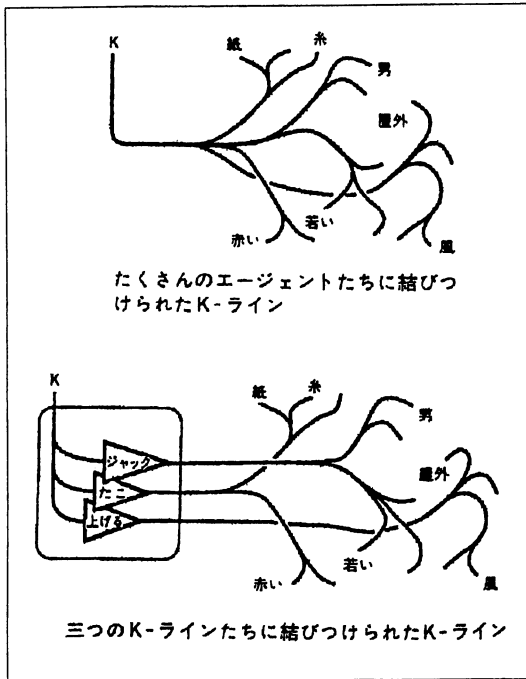


図3 K-ライン

(Minsky, M. 心の社会, 東京, 産業図書, 1990, p. 125)

K-ラインとは沢山のエージェント（心を構成する小さなプロセスの一つひとつ）を結んだ記憶構造のことである。「ジャックが凧を上げるのを見た」という時、「ジャック」「凧」「上げる」というK-ラインが活性化することにより、以前に形成されていたK-ライン（上図）が、再び活性化される（下図）。

ここで、「知識」の活性化が意識上のみでなされているのかという問題が提出できる。精神分析の立場から、Sigmund Freud は、人間の心理を下意識もしくは潜在意識の世界に抑圧された性的な衝動が表れたものだとし<sup>30</sup>、無意識の世界を重要視したが、意識・無意識の関係を「知識」の活性化の問題に援用した時、認識の包括性という事実から、「知識」の活性化は無意識上でも生じると考えられる。何故なら、我々は全ての「知識」が意識上において活用されなくても、様々な行為が可能であることは経験上明らかであるからである。

我々の「知識」は、何らかの「情報」が「知的活動の過程」に侵入してくると同時に、意識、無意識に関わらず、その「情報」に関連する「知識」が一斉に活性化される。それ故、個々人の「価値観」が異なる原因の一

つとして、「経験の違い」が挙げられるが、「経験の違い」とは、意識・無意識の領域を含んだ心の世界における「知識」の活性化の異なりなのである。

しかし、ここで重要なのは、「知識の活性化」が決して無秩序になされるのではないことである。我々は全ての「知識」が「意識上」において活用されなくても、様々な行為が可能であるが、全ての「知識」が意識上に現れないのは、多分、「知識」の活性化を制御する何らかの機能がある為と考えられる。この「制御機構」をどう考えるべきかという問題は、以下の「価値づけ-感情」関係の考察により、明らかにする。

### B. 感情・情動・アージュ

「価値づけ-感情」の関係を問うにあたっては、認知科学分野で提出された「アージュ理論」<sup>30)</sup>を基盤にして論述する。

後述するように、従来の感情論は、各分野で細分化され専門性が強くなったために、様々な立場が乱立しているのが現状である。しかし「アージュ理論」は、それらの異なった理論を統合する可能性をもった理論として評価できるものである。それ故、以下は、「アージュ理論」を基盤に、1)「アージュ理論」の感情の捉え方、2)「今ここ」原理と「関心」機能、の2点について留意し論述する。

#### 1. 感情論小史

感情とは、一般には精神活動のいわゆる知情意の一面面を代表し、対象そのものの認知、または表象に結び付いた主観的な印象、心的状態をいう。そして感情の中でも最も激しいものが情緒、あるいは、情動と言われる。感情は英語で「emotion」であるが、その中に含まれている、「motion」を語感として示すために、情動という言葉がよく用いられることが多い。また、例えば、愛着とか嫉妬といったような、持続的な傾向を持ったものを情念ということが多い。本稿では、喜怒哀楽などの具体的心的状態を情動と呼び、情動の総体を感情と呼ぶことにする。但し、各分野に於いて呼び方がほぼ統一されている場合は、その分野の用語法に従う。

さて、感情についての考察は、古くは、哲学において、最近では、心理学、社会学、認知科学、そして、脳科学(Brain Science)などにおいてなされてきた。以下は、各分野でどのような研究がなされてきたのかを概観する。

#### a. 哲学分野における感情論<sup>7-9, 14)</sup>

古代ギリシアにおいて、Platon は、イデア(idea)に対するエロス(Eros)を説き、ストア派は情動や情念にわず

## 価値観の生成過程に関わる問題点

らわされぬ状態、即ち「アパティア」を道徳的理想とし、感情そのものの本質を反理性的なものとして捉えた。

一般に感情は、知性、意志と共に意識内容ならびに作用においての三大要素の一つとして扱われるが、この意識の三分法を用いたのは、I. Kant である。Kant は、知性や意志と並ぶ感情を、芸術を生み出す人間の能力として、衝動的に起こる感情とは区別する。衝動的に起こる感情は、理性に対する身体的なものとして重要視しない。しかし、18 世紀半ば、Kant 哲学に反対の態度をとる、J. G. Hamann, F. H. Jacobi, J. G. Herder に代表される感情哲学の立場が現れた。これは、理知的に偏した啓蒙思想（Kant の思想もまた含まれる）への反抗として現れたのである。その基本的態度は、信条・情熱・信仰を本源的なものとして見なし、哲学の源泉を感情的・非合理的なものに求めるというものである。

また、近代フランスにおいては、Descartes, D. Diderot, C. A. Helvetius, P. H. T. d'Holbach らにより、感情は歴史を推進させる決定的な力として扱われ、更に近代イギリスにおいては、道徳説と結び付き、感情道徳説として現れる。感情道徳説とは、道徳的行為の動機を、感情におく道徳説のことである。その代表者には、Shaftesbury, Francis Hutcheson がいるが、Shaftesbury は、人間に具わる自愛と社会的愛情との調和が、個人と同時に社会にとっての善かつ美であるとし、Hutcheson は、人間に具わっている道徳感覚がもっとも高く認められるのは、無私の愛情・仁愛であると述べ、ここに道徳の基礎があるとみなしている。因みに 19 世紀半ばには、感情に関する概念は、芸術学、もしくは美学と結び付き、感情美学という新たな流れを生み出している。

哲学分野に於ける感情は、理性に反するものとして見なされてきた。理性に反しないものとする感情論の立場でも、宗教的な色彩を強く受けていたり、衝動的な感情を芸術生成の感情と区別・排除し、感情一般を捉えることはなかった。いわば、条件付と感情論といえる。

### b. 社会学分野における感情論

社会学の分野においては、感情そのものというよりも、感情の機能的な側面を中心にとらえていると考えられる。例えば、Charles Lindholm に於いては、社会的現象である「カリスマ」は、「何よりもまず、一つの関係、指導者と信奉者両方の内的自我が関与する相互交流」<sup>31)</sup>によって生み出されるものであると主張され、カリスマが生み出される原因に、カリスマを形成する群衆の「興奮しやすさ」、「非利己性」、「感情的はげしさ」といった

一定の特徴を見出し、感情の機能の重要性が強調されている。

我々は、感情の機能（喜怒哀楽など）にはどのようなものがあるか、経験上知っている。カリスマに関しては、不安であるとか、自己陶醉につきまとうような快楽とかが関連することは容易に推測できるが、その構造やメカニズムがどのようになっているのかについては、社会学では追求されない。社会学では、社会現象の解明が主眼であり、その現象を捉える原因あるいは要素として感情を見なすのであるから、感情自体の構造やメカニズムについて追求する必要はないのかもしれない。社会学分野の感情論は、いわば機能主義的感情論である。

### c. 脳生理学分野および心理学分野における感情論<sup>32)</sup>

経験上、我々が知っている感情の機能が、どのようなメカニズムに「対応」しているのかを追及する分野は、脳生理学および心理学の分野である。

脳生理学、及び心理学の分野における情動についての考察は、James-Lange 説から始まる。James-Lange 説とは、情動の意識的経験に先行して、身体や内臓の情動反応が起こるとする仮説である。「悲しいから泣くのではなくて、泣くから悲しいのである」というのは、よく出される例である。

しかしながら、W. B. Canon は、James-Lange 説に異論を唱え、P. Bard の研究やイギリスの神経学者である H. Head の研究を基盤に、視床を情動の中核として考える視床説（後に Canon-Bard 説となる）を提唱した。これを機に情動研究は急速に進展していく。

1930 年代後半には、P. Papez の「嗅脳」を重要視した「Papez の回路」と呼ばれる情動の回路についての説が、1940 年代には、P. Bard の怒りの中核（扁桃核）の発見が、更に、情動の作られる部位が辺縁系であるとする P. Maclean による主張が、1950 年代には、J. Olds による「快の中核」（内側前脳束）の発見が、1960 年代には、U. Ungerstedt による、視床下部、辺縁系、大脳皮質をつなぐ経路の組織化学的解明が、それぞれなされた。

これまでの研究から解明されたことは、怒りや快のような情動が、視床下部や辺縁系と関係があることは確かであること、その中でも特に扁桃体と密接に関連する視床下部は情動の表出に重要な役割を果たしていること、そして海馬体が、記憶を介しての情動反応に関与していること等である。

### d. 感情の統合的理論

以上、感情について、哲学・社会学・脳生理学および

心理学の分野を概観してきたが、明白なのは、感情・情動については、十分に解明されているとは言い難いという事実と、各分野の専門性から生じる様々なモデル、視点、観点、考え方が提出されているという事実である。特に後者については、感情論の研究基盤の新しさ、弱さ、あるいは感情そのものの構造・機能の複雑さの為であろうが、乱立状態にある。そこで、仮説的であるにせよ、統一的な理論の構築が待たれるところなのだが、統一理論として評価できる理論はまだ数少ない。しかし、注目すべきその一つに認知科学分野で提出された戸田正直の「アージュ理論」がある<sup>30)</sup>。

## 2. 「アージュ理論」と「価値観」の概念図

### a. 「アージュ理論」と「情動主義」

「アージュ理論」とは、簡潔に言えば、“感情およびアージュを、行動を制御する心的プログラムとしてみなし、感情及びアージュが、人間の行動を制御するものであると考える理論”<sup>30)</sup> のことである。「アージュ」という概念を提出するにあたり、戸田はその前提となる4つの仮説(野生合理性、非自覚性、導出可能性、文明環境における感情の働きの部分的非適合性)を提示し、「アージュ」という概念を“野生環境を背景としての、遺伝的に基本枠が設定された行動選択・実行用の心的ソフトウェア”<sup>30)</sup> として考えた。換言すれば、感情とは、人間が生得的に持っている機能であり、活動を制御する心的プログラムのことを指す。戸田は、このように考えることにより、心的ソフトウェアの統一理論を目指している。

Alasdair MacIntyre は、“すべての価値判断は、またとりわけすべての道徳的判断はそれ以上に、嗜好の表現、感じ方の表現にはかならない、なぜなら、本性上それらは道徳的あるいは価値判断評価的なものだからである、とするような信条”<sup>33)</sup> を「情動主義」と呼び、感情が人間の行動の作用因として働くものとして見なすような視点に注目しているが、この観点から言えば、「アージュ理論」の考え方も「情動主義」に集約される。

### b. 「アージュシステム」の概要

ここで、アージュシステムの概要を示しておく。戸田は、アージュの働きには、1) 起動相 (activation phase) 2) 意思決定相 (decision making phase) 3) 行動相 (action phase) 4) 事後評価相 (post mortem phase) の4つの「相」があり、それぞれ、意味抽出(状況判断)、活動プラン(状況判断の結果に対応したプラン)の選択、活動プランの実行、活動プランの評価(反省・学習)がなされると主張する。例えば、「恐れ」と「逃走」の関係を考

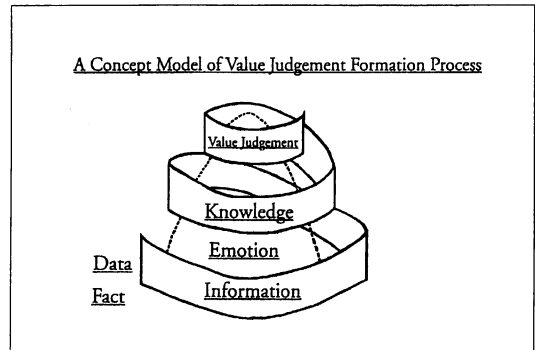


図4 「価値観」の概念図

「情報」「知識」の獲得並びに価値判断に至る一連の過程の基盤には、感情の存在がある。感情の機能により、この一連の過程は影響を受ける。

えると以下ようになる。まず知覚データを情報処理して得られる状況が、自分に危害を加えるものであると判断した時、恐れというアージュが起動する。起動した「恐れアージュ」は、状況に対応したプログラム(ここでは逃走プログラム)を選択する。選択されたプログラムは、実際に逃走という行動を行使する。その後、この逃走行動が妥当であったのかどうか評価され、逃走プログラムを選択したことが、自分の生存にとって適切であったのか否かという、反省・学習がなされる。この一連のシステムが「アージュシステム」である。

### c. 「価値観」生成モデルの概念図

以上の論述を踏まえ、特に前章の「知識」と「情報」の関係、および「情動主義」の観点を考え合わせ、「価値観」生成モデルの「概念図」を示すと以下ようになる。(図4)

## 3. 「感情」と「認知・認識過程」

我々は、怒りという情動による高ぶった心理状態を、自ら情動を押し止めて冷静に判断しようとするところがあるが、「情動主義」という観点からは、「感情」と「認知・認識過程」との関連はどう捉えられるか。具体的には、先述した「知識の活性化」が「感情」によってどのように制御されるのかという問題になるのだが、そのヒントとしては「アージュ理論」で提出された「今ここ原理」が手がかりになる。

### a. 「今ここ原理」

「今ここ原理」とは、アージュ強度がとくに高い時に、「今ここ」に存在しない対象に関わる情報処理を機械的に排除し、現在の問題解決に深く関わった「今ここ」に

## 価値観の生成過程に関わる問題点

ある対象のデータだけに情報処理を集中させる傾向のことである。

例えば、「恐くて」逃げていると時の視野は、回りの状況などが全く分からずに、逃げ道ばかりを見てしまうわけだが、これは、「今ここ」原理が、視覚系において働いているからである。

### b. 関心機能と「知識」の活性化との関係

そこで「知識」の活性化を制御するという観点から、「今ここ」原理を捉え直すと、「関心を持つ・持たない」という現象が、「今ここ原理」に似ていると解釈できる。

例えば、Carl Gustav Jung<sup>34)</sup> の「共時性(synchronicity)」や各個人の絵の解釈の仕方を考えてみると、前者の場合、「枯れ葉が落ちるとき、命が終わる」という共時性は、因果関係のない「枯れ葉が落ちる」「命が終わる」という両者の「知識」を関係づけることが必要であるが、これらは恣意的になされるものであることから、「関心を持つ・持たない」によって制御されると見なすことができ、また後者の場合、「この作品は、筆の使い方がすばらしい」「つまらない絵である」という解釈の違いが、各個人の絵に対する「関心の深さ」=「知識の活性化の程度」に依るところが大きいことから、「関心を持つ・持たない」によって「知識」が制御機構されると考えられる（関心機能と「知識」がどのように作動するかは、モデルを提示したところで論じる）。

この時、「関心を持つ」ということは、経験的には多くの「知識」を利用するということだから、「関心を持つ」は、対象に関する「知識」の活性化の範囲を広げることを意味し、「関心を持たない」というのは、その逆であることになる（範囲の拡大・縮小は、「今ここ原理」とは逆に機能する）。関心機能は、今ここ原理の如くその範囲を何らかの形式で変化させることにより、「知識」の活性化を制御するのである。

ここで、「関心機能」・「知識の活性化」・「感情」の関係をモデル化すると以下ようになる（図5）。

更に、これまで論述した事柄を纏めてモデルを構築すると以下ようになる（図6）。

個人的な志向としての価値が、個人により異なるという現象は、非論理的である「感情」が、「知識」を制御するというメカニズムがあるからである。

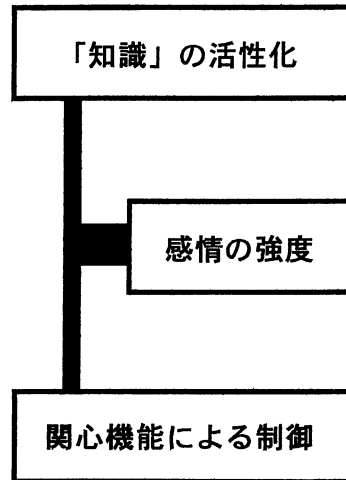


図5 「関心機能」「知識の活性化」「感情」の関係  
「知識」の活性化と関心機能とは相関関係にある。この関係の結び付きに影響を与えるのが感情の強度である。

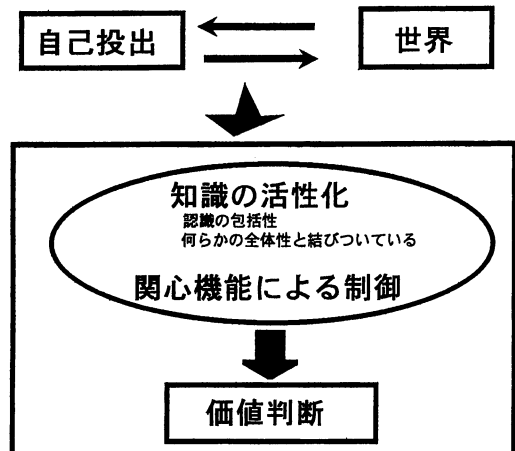


図6 「価値観」生成モデル概略図

価値判断は、自己投出と世界とのやりとりにおいてなされるが、その時すでに獲得した「知識」が利用されなければならない。「知識」の活性化が関心機能により制御されることで「知識」は価値判断に利用されることになる。

### C. その他の留意点

これまで「知識・情報」「感情」を中心に述べてきたが、「価値観」の生成にとっては、必要条件ではあるが、必要十分条件でないことは明らかである。では、「知識・情報」「感情」以外の注目すべき要素とは何か。現在考え



られるものを以下に提示していく。

## 1. 「類比・類推」と「比較」

### a. 「類比・類推」とは何か

我々は、事象を認識する前提として、過去に経験したものとこれから経験するものとを識別する能力が必要である。その能力を「類比・類推」という。「類比・類推」とは、“広義には二つの事象のあいだに認められる類似関係の暗示あるいは認識に基づく推理方法を意味する”<sup>16)</sup>が、それは、“モデルやイメージの使用のような比較をも含む”<sup>16)</sup>機能である。もし、「類推・類比」という機能がなければ、思考は成り立たず、「価値観」もまた成り立たない。

### b. 「類比・類推」と「比較」

「類比・類推」と「比較」という機能を比較した場合、それぞれの機能が作用した結果を考えると、「類比・類推」は二つの事象が弁証法的に合成され新たなものを生み出すことがあるのに対し、「比較」は取捨選択することを意味する。それ故、認知・認識過程を経て価値判断に至る時、価値として認められるものは、二元的に区別できないものもあることから、「価値観」には、単に既に持っている知識と新しく獲得した情報とを「比較」する機能ではなく、新たなものを生む「類比・類推」という「比較」をも含んだ機能が基盤にあると見なす方がよい。

では、「価値観」を形成する上で、我々は何を「類比・類推」しているのか。先述の如く、「類比・類推」が働かなければ、思考＝認知・認識過程は有り得ないのだから、何を「類比・類推」しているのかという疑問に対しては、認識によって獲得される「情報」「知識」は全て「類比・類推」の対象であるという答えが導き出されるかもしれない。加えて「知識」には非言語的なものもあるのだから、何をどのように「類比・類推」しているのかは明確には分からない、ということになるかもしれない。しかし、部分的にしる明らかにできるものはあるはずである。そこで、以下では分かる範囲のものについて考察するという趣旨の元、論をすすめる。

### c. 「類比・類推」の対象

まず念頭に上るのは、自らがこれまでに獲得してきた過去における価値判断基準と、「情報」を獲得することで得られる新しい「知識」との「類比・類推」である。その結果が、新しい価値判断基準となる。新しい価値判断基準には、過去の価値判断基準が優先され活用されることもあるし、とって変えられることもある。また混在した形になることも考えられる。

しかし、「認識の包括性」という事実から、「類比・類推」は、客観的には見るができない。その為、何と何がというような具体的な「類比・類推」に関わる事柄そのものについては、明確にすることができないと言える。

それ故、現段階では、言語化される知識に頼らざるを得なくなる。次節では、価値判断に利用される基準を考える上で、言語化される概念で且つ基本的な構成要素であると考えられる「時間概念」と「自己同一性」を取り上げる。

## 2. 時間概念と自己同一性

### a. 時間概念

我々は、時間の概念によって、過去・現在・未来の区別をつけることができる。その区別は、「現在」からの「想起」及び「推論」によってなされるのであるが、例えば、そこら辺りに転がっていた壺が、室町時代に造られたと分かったとたんに価値が跳ね上がるという希少価値について考えてみると、「希少価値」とは、そのものが世の中に希で、少ししかないところから生じる価値であり、後にも先にも希であるということに意義あるのだから、希少価値には、「過去」「未来」という時間概念を前提の一つとして持つといえる。もし、全くの同一のものが数多く発見されたならば、その時点で「希少」ということにはならず、「希少価値」の概念は崩れ去る。

「過去」にしる「未来」にしる、時々刻々「過去」へと変貌する「現在」において、個人が意識・無意識に関わらず、時間概念を判断に利用すること無しには、「価値観」に於ける価値判断はできない。この意味において、人間以外の動物には、時間という概念がない為、その動物には価値判断はできないといえる。

### b. 自己同一性

先述の如く、価値判断時には、過去の価値判断基準と新たに獲得した「知識」とを「類比・類推」することが必要である。「類比・類推」は、モデルやイメージの使用のような比較をも含む、二つの事象のあいだに認められる類似関係の暗示あるいは認識に基づく推論であるが、ここで重要なのが類似関係である。類似関係が、認められないのであれば、「類比・類推」は成り立たない。また、類似関係は、主観的に、対象に対して等質関係が認められなければならないという前提があるはずだから、価値判断時における、過去の価値判断基準と新たに獲得した「知識」との間の等質関係が認められなければならない。実は、この等質関係を支えるのが、自己同一性で

価値観の生成過程に関わる問題点

ある。「自己」という概念がなければ、「過去の自分」と「現在の自分」とは結びつかなくなるのだから、従って判断に利用される「知識」は一貫性を無くし、「知識」の活性化はランダムになる。

c. 時間概念と自己同一性との関係

これまで、自己同一性と時間の概念とは別々に論じてきた。しかしながら、実は、これらは互いに非常に密接した関係にあることが分かる。例えば、「人を殺してはいけない」という価値判断では、「人を殺した自分」を、そして「将来の自分」を考えているはずであり、具体的には、「牢獄に入っている自分」「法律」「社会的制裁」および「社会的に制裁された自分」などが挙げられるはずである。「牢獄に入っている自分」「社会的に制裁された自分」は、仮定の話だが、そこには「未来の自分」という概念があり、「法律」には、法律についてどれだけ知っているのかという「知識」と「過去の自分」が、また、「社会的制裁」には、それが「過去においてどのようになされてきたのか」という「知識」と、「それを知っている自分」という概念があるはずである。このように「人を殺してはいけない」という判断には、自己同一性や時間の概念に関わる知識が混在して活性化されていると考えられる。

以上「類比・類推」の対象となる要素について考えてきたが、これらは部分的なものであり、まだまだ残された問題は多い。しかし、今回は残された問題を論じる余裕がなく、またそれに答える「知識」が、現段階では不十分なので、今後の課題としておく。

IV. 「価値観」生成モデルの構築とその解釈

A. 「価値観」生成モデル

ここで、これまで論述した「価値観」「認識の包括性」「知識の活性化」「アージュ理論」「関心機能」を手がかりにモデルを構築・提示し(図7)、以下に説明する。

1. 自己投出と世界

第III章でも触れたが、人間における「価値観」成立の基盤には、人間と世界(全ての事物・事象)との接触と関連のあり方とが認められなければならない。そして、人間と世界に介在するのが「自己投出」という人間の機能である。「自己投出」の観点から人間を捉えた時、我々の身体、手足は道具的な存在となる。視覚障害者の杖の使い方と同じように、身体、手足を道具として活用することによって、我々は様々な「知識」を「包括的」に獲得する。

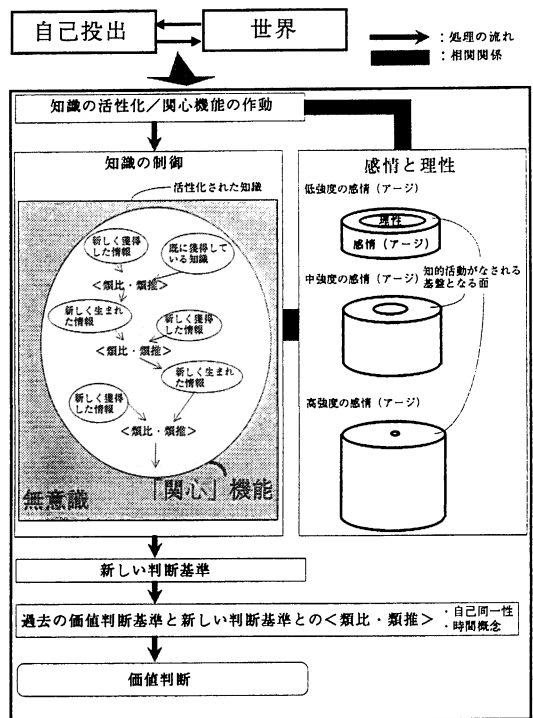


図7 「価値観」生成モデル

2. 関心機能の作動と「知識」の活性化

関心機能と「知識」の活性化は、ほぼ同時に起こると考えられる。例えば、「kakeru」という音波によって生じる「聞き間違い」は、「書ける」「欠ける」「掛ける」「賭ける」などの活性化された「知識」の異なりであるが、もし、関心機能により「知識」が「検索」「選択」されるとした場合、「kakeru」という物理的音波は、一度関心機能により照合されるはずであるから、入力された物理的音波と、検索される「知識」との対応は矛盾しない。物理的音波は、同質なのだから、聞き間違いが起こるのは、関心機能の異常ということになる。その時、また同じ物理的音波が入力されれば、同じ聞き間違いをするはずである。これは、我々の経験上、不自然であると考えられる。

それ故、関心機能は、「知識の活性化」よりも先に作動するというよりも、「kakeru」という物理的音波によって関連する全ての「知識」が活性化された時、それとほぼ同時に作動し、その関心機能が働く「最初の範囲」に、ある特定の「知識」が活用されると見るべきであろう。偶々、関心機能の最初の範囲に、文脈に対応しない「知

識」が活性化された時、聞き間違いが起こるのである。しかしながら、関心機能の作動する最初の範囲がどのように決定されるかは、今のところ分からない。

因みに、脳科学では、「ニューロン間の結合の強さ」が、「インパルス（活動電位）伝達の優位性」を示していることが知られていることから<sup>28)</sup>、特定の「知識」が活用されるようにする為には、繰返しその「知識」を活性化することで、特定の「知識」の優位性を造ればよい。

### 3. 「意識・無意識」

「知識」の活性化と「関心」機能の作動により、「知識」は制御されるが、ここで「意識・無意識」の問題が提出される。「認識の包括性」あるいは「知識の包括性」という事実は、意識上に全ての「心象」が完全に無くても、我々が、様々な行動を遂行できることを示している。これを「知識」の活性化と関心機能との関係から捉えた時、「意識」は関心機能の作動領域内として、無意識は関心機能の作動領域外として考えることができる。

因みに、制御された結果である、「新しく生まれた情報」は、「新しく獲得された情報」と類推されたものを全て含めた表現である。

### 4. 過去の価値判断基準

便宜上、「過去の価値判断基準」は、「知識の制御」とは異なる場所に明記してあるが、現実には、これも「知識の制御」の中の一要素であることには変わりはない。ただ、最終的に判断を下す時には、「過去の価値判断基準」と類比・類推することによって価値判断されるのであるから、その点を強調する為に意図的に区別して明記してある。

### 5. 「価値観」の基盤となる感情

第III章に於いて、「関心」機能と感情との関連を述べたが、Brain Science の分野で、感情を司る重要な器官である「扁桃核」が五感からの刺激を一度統合して、生物学的な価値判断をした後に大脳皮質へインパルスを伝達するという機能を持つことが、明らかにされつつあることから<sup>29)</sup>、その他の「知識の活性化」「類比・類推」「判断」などの機能もまた感情に制御されていると考えられる。

ここで、「類比・類推」「判断」そのものは理性的な機能ではないのか、という疑問を持つに違いない。この背景には、「感情」と「理性」とが互いに相反するものとして捉える観点がある。確かに、「類比・類推」「判断」そのものは「理性的」な機能であり、一般的な意味での感情的な機能ではない。しかしながら、「アージュ理論」を核

とする情動主義の観点からは、感情と理性とは互いに相反するものではなく、むしろ共存していると考えられる。人間の心的活動の基盤に感情（アージュ）を中心に据え、アージュの強度に何らかの閾値を設定し、アージュ強度に影響されない状態を「理性的」な状態と呼ぶ時、「理性」は、「アージュ強度が非常に小さい心的状態」と見なすことができる。その時、「知識」の制御は、「感情」と「理性」との支配を受けるが、「感情」の強度が高くなると、「理性」は、侵食されるように「感情」の支配下に置かれるようになる。特に、「感情」の強度が最高潮に達したときには、判断そのものは不可能になり、理性は、ほとんど感情の支配下に位置するようになる。代表的な例は、「パニック」の状態である。

従って、「類比・類推」「判断」などの「理性的」であると捉えられてきた機能もまた、「感情」を基盤に成立すると考えられるべきである。モデルにおいては、理性を「円錐」、感情を「円柱」と見なし、感情が理性を覆うように、円柱が円錐を含んだ形で表現した。上部の面が、知的活動がなされる基盤となる面で、「知識」の制御はこの面上で行なわれる。

### 6. 「類比・類推」

「類比・類推」という機能が、「新しく獲得した情報」と「既に獲得している知識」、あるいは「新しく獲得した情報」と「新しく生まれた情報」との間どのような作用を果たすのか、具体的には分かっていない。しかしながら、感情との関わり合いを考えたとき、もしかすれば、感情的に自分にとって有益であるものが、弁証法的に「新しく生まれた情報」として、そして最後の価値判断に関わる要素として生き残るのかもしれない。しかしながら、これはあくまでも推測に過ぎない。

## B. 「価値観」生成モデルと利用者

以上、「価値観」生成モデルを構築してきたわけだが、モデルの観点から、利用者の図書館に対する「価値観」がどのように生じるのかを具体的な状況を設定して考えてみる。

ここでの具体的な状況とは、レファレンスライブラリアンと利用者との「解釈的対話」によりなされるコミュニケーションの過程である。図書館の機能に関わる価値を考える上で、利用者とレファレンスライブラリアンとの関係は重要な問題である。以下に具体的な状況の内容を分かりやすくする為に、「価値観」生成モデルを構築するにあたって留意した点に「条件」を加えて、利用者として

## 価値観の生成過程に関わる問題点

ファレンスライブラリアンとのコミュニケーション状況を設定することにする。

[前提条件]:

「利用者」: →図書館の利用に関して精通しており、これまでの経験からレファレンスに関しては非常に良い印象を持っている

「レファレンスライブラリアン」:

→レファレンスに関して不慣れであり、言動に注意を払わない

「情報」: →利用者とレファレンスライブラリアンとの間にかわされる会話、および利用者による認知・認識されるレファレンスライブラリアンの行動

「知識」: →利用者のレファレンスに関わるこれまでの経験

「過去の価値判断基準」:

→レファレンスライブラリアンが優秀な図書館は非常に良い図書館である

「感情(情動)」: →不快感

上記の条件の元で、「価値観」生成モデルで提示した過程を提示すると以下のような過程を経ることになる。

(1)利用者によるレファレンスライブラリアンの認知・認識

利用者は、自己投出により、レファレンスライブラリアンに関する「情報」を、そしてコミュニケーション過程でかわされる「情報」を獲得していく。

(2)レファレンスに関する「知識」の活性化と関心機能の作動

「情報」を獲得した時点で、レファレンスに関する「知識」が活性化され、ほぼ同時に、関心機能が作動する。「情報」を獲得した時点で、不快感(「感情」)が生じた時、関心機能は、不快感(「アージ」)の強度により今ここ原理のごとく働き、それに伴う「知識」を更に活性化し、意識上にもたらす。

(3)関心機能に制御された意識の世界での「知識」と「情報」との類比・類推

「感情」に伴いつつ獲得された「情報」は「知識」と類比・類推されることで新しい判断基準を生成する。

(4)新しい判断基準の生成

新しい判断基準は、上記の条件の場合、例えば「今回利用した図書館のレファレンスはこんなも

のである」という事実判断的な基準として生じる。この基準は、「過去の価値判断基準」と類比・類推され、最終的に価値の色合いが付与される。

(5)「過去の価値判断基準」と新しい判断基準との類比・類推

例えば「レファレンスライブラリアンが優秀な図書館は非常に良い図書館である」という「過去の価値判断基準」は、(4)の「今回利用した図書館のレファレンスはこんなものである」という基準と類比・類推され、「この図書館のサービスの質は悪い」とか「あのレファレンスライブラリアンの態度はあるべき姿ではない」等といった価値判断へと至る。最終的な価値判断の内容は、各個人により異なるが、それは獲得する「情報」「知識」及び「感情」に起因する。

## V. 問題点とこれからの展望

### A. 残された課題と問題点

本稿は、以上である。しかし、今回は、ようやくスタートポイントに立つことができたに過ぎない。それ故、概略的な「モデル」を構築するところに留まざるを得なかったのであるが、以後、より詳細に考察すべき問題は山積みになっている。以下は、それらの問題にどのようなものがあるのかを見ていくことにする。

#### 1. 「包括性」に関わる問題点

第III章において、我々の獲得する知識が、「包括的」であることを示したのであるが、その範囲については全く分かっていないといってよい。「知識」には、言語的な知識と非言語的な知識があり、前者には、無限と言える程の「属性」の多さが、後者には、「属性」の捉え難さが顕著に表れている。それ故、知識が包括的であるその範囲を特定するのは、非常に難しい。更に、非言語的知識に対する様々な捉え方に関して、例えば、Computer Scienceの分野に代表される「意味ネットワーク」あるいは「概念ネットワーク」、あるいは心理学の分野に代表される、ポリグラフなどで獲得できる脳波の測定は、「知識」の活性化を含む脳の活動を知る手段であるが、これらの見方は、一つの見方であるにすぎず、非言語的知識の測定法・観察法などに関連する技術的な問題も伴って、ベストな見方とは言えない。今後は、非言語的知識に対する再考が必要になる。

#### 2. 感情と「関心」機能に関する問題点

第IV章では、感情と「関心」機能の関係を、「アージ

理論」を手がかりに考えてきた。そこでは感情が、「関心」機能を制御することによって、活性化された「知識」を制御するという関係を見てきたのである。しかしながら、感情と「関心」機能との関係を考えるとき、具体的な感情の生成メカニズムと「関心」機能との結びつきについては何も触れなかった。それは感情自体が千差万別に変化し、いわば混沌とした状態にあり、捉えどころがないからである。この感情の複雑性を何らかの方法で追求していかなければ、具体的に、感情と「関心」機能との関係をうまく捉えていくことができない。更に、「関心」機能が、脳の構造的観点からどのように捉えられるのかという問題も提出される。現在、「感情工学」「感性工学」「感情心理学」なる研究分野が興隆しているが、感情と「関心」機能の更なる解明にはこれらの分野の進展が望まれる。

### 3. その他の問題点

上述の問題の他にも多くの問題を抱えていることは、言うまでもない。しかし、ここでは詳記する余裕がないので、以下は考えついた問題点を簡条書きにしておく。

- ・「類比・類推」(アナロジー)は脳の活動の基本となる機能であるが、一体どのように行われるのだろうか。また、「類比・類推」される対象は、「類比・類推」によってどのように変化していくのだろうか。
- ・自己投出という機能は、認識の「包括性」を支えるための我々の機能であるが、脳の構造にどのように対応しているのだろうか。
- ・基本的に「価値観」には、新しく獲得した知識なり情報なりを、「類比・類推」するために、過去の価値判断基準を必要とするが、過去の価値判断基準がどのように獲得されてきたのかを考えていかなければ、「価値観」を理解したことにはならない。
- ・活性化された知識のうち、「関心」機能が作用していない意識下の知識は、どのように判断に関係し、影響を与えているのであろうか。

### B. これからの展望

価値論の観点からの追求が、様々な事象に於いて意義のあることは、第1章で述べてきたとおりである。また一方で、藤川正信は、『図書館情報学ハンドブック』の序論において、“図書館情報学は、人間の知情意の働きによる記号化行動と、その所産としての記録、ならびにそ

の利用に関し、科学技術の立場に基づく体系的研究を行う分野である”<sup>22)</sup>と述べているように、人間という観点も重要であると考えられる。

例えば、分類法の欠点として、様々な可塑性(言葉の可塑性、科学技術の進歩に依るところの可塑性など)に対応できない点が上げられるが、可塑性に柔軟に対応する脳の働きに注目した時、その処理機構を疑似すれば可塑性の問題にうまく対応できるはずである。

図書館情報学が、社会と人間と情報との関わり合いを追及していく分野として、より一層広範囲にわたり、拡張・発展していく為には、価値論の立場からのアプローチと個人の知的活動の過程を対象とする研究が、融合していくことが重要になると考えられる。

### 引用文献

- 1) 見田宗介. 価値意識の理論: 欲望と徳徳の社会学. 東京, 弘文堂, 1966. 379p.
- 2) 岡澤和世. 情報学講義ノート2. 東京, 敬文堂, 1989. 237p.
- 3) 藤永保ほか編. 心理学辞典. 東京, 平凡社, 1981.
- 4) Crane, Diana. Invisible College. Illinois, The University of Chicago Press. 1972, 260p. (見えざる大学: 科学共同体の知識の伝搬. 津田良成監訳. 東京, 敬文堂, 1979, 260p.)
- 5) Garvey, W. D. Communication: The Essence of Science., 1979, 302p. (コミュニケーション: 科学の本質と図書館員の役割. 津田良成監訳. 東京, 敬文堂, 1981, 302p.)
- 6) Kuhlthau, C. C. A Principle of Uncertainty for Information Seeking. Journal of Documentation. Vol. 49, No. 4, p. 339-355 (1993)
- 7) 荒川幾男ほか編. 哲学事典. 東京, 平凡社, 1971.
- 8) 森 宏一編集. 哲学辞典. 第四版. 東京, 青木書店, 1985.
- 9) 村瀬能就 編. 哲学用語辞典. 第10版. 東京, 東京堂出版, 1988.
- 10) 森岡清美; 塩原勉; 本間康平. 新社会学辞典. 東京, 有斐閣, 1993.
- 11) 日本教育社会学会編. 教育社会学辞典. 東京, 東洋館出版, 1973.
- 12) 日本大辞典刊行会編. 日本国語大辞典. 東京, 小学館, 1973.
- 13) 広重 徹; 伊東俊太郎; 村上陽一郎. 思想史のなかの科学. 東京, 木鐸社, 1975, 269p.
- 14) 栗田賢三; 古在由重編. 哲学小辞典. 東京, 岩波書店, 1979.
- 15) Rambaugh, S. Savage. チンパンジーの言語研究: シンボルの成立とコミュニケーション. 小島哲也 訳. 京都, ミネルヴァ書房, 1992. 470p.
- 16) 渡部昇一ほか編. ことばコンセプト事典. 東京,

価値観の生成過程に関わる問題点

- 第一法規出版社, 1992.
- 17) Polanyi, Micheal. 個人的知識: 脱批判哲学をめざして. 長尾史郎 訳. 東京, ハーベスト社, 1985. 382p.
  - 18) Polanyi, Micheal. 暗黙知の次元. 佐藤敬三訳. 東京, 紀伊国屋書店, 1980. 134p.
  - 19) Polanyi, Micheal, Grene, Marjorie. ed. 知と存在: 言語的世界を超えて. 佐野安仁; 沢田允夫; 吉田謙二 監訳. 京都, 晃洋書房, 1985. 308p.
  - 20) McDonough, A. M. Information Economics and Management System. New York, McGraw-Hill, 1963 (情報の経済学と経営システム. 長坂精三郎訳. 東京, 好学社, 1966. 341p.)
  - 21) Wersig, Gernot. The Phenomena of Interest to Information Science. The Information Scientist. Vol. 9, No. 4, p. 127-140 (1975)
  - 22) 図書館情報学ハンドブック編集委員会編. 図書館情報学ハンドブック. 東京, 丸善, 1988, 1332p.
  - 23) 津田良成編. 図書館情報学概論. 第二版. 東京, 勁草書房, 1990, 240p.
  - 24) 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科. 「情報」概念をめぐる基礎的検討: 図書館・情報学分野における情報研究の基盤として. 慶應義塾大学, 1993, 288p.
  - 25) 富永健一. 情報の氾濫と知識の貧困: 「情報」社会は「知識」社会たりうるか (特集: 情報社会を憂うる). 季刊アステイオン. No. 8, 春, p. 96-122 (1988).
  - 26) Glare, P. G. W., ed. Oxford Latin Dictionary. 8th ed. New York, Oxford University Press. 1982.
  - 27) Rumelhart, D. E. 人間の情報処理: 新しい認知心理学へのいざない. 御領謙 訳. 東京, サイエンス社, 1979, 350p.
  - 28) 伊藤正男監修; 松本元編. 脳と心. (別冊日経サイエンス). 東京, 日経サイエンス社, 1993. 207p.
  - 29) Minsky, Marvin. 心の社会. 安西祐一郎 訳. 東京, 産業図書, 1990. 567p.
  - 30) 戸田正直. 感情: 人を動かしている適応プログラム. (認知科学選書 21). 東京, 東京大学出版会, 1992, 271p.
  - 31) Lindholm, Charles. カリスマ: 出会いのエロティシズム. 森下伸也訳. 東京, 新曜社, 1992. 359p.
  - 32) 安田一郎. 感情の心理学: 脳と情動. 東京, 青土社, 1992. 290p.
  - 33) MacIntyre, Alasdair. "Emotivism: Social Content and Social Context" After Virtue: A Study in Moral Theory. London, Duckmorth, 1981. p. 23-35
  - 34) Proggoff, Ira. ユングと共時性. 河合隼雄; 河合幹雄 訳. 大阪, 創元社, 1987. 212p.